
ソーロンゲグッバイ

夏目紗依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソーロンググッバイ

【Nコード】

N6792I

【作者名】

夏目紗依

【あらすじ】

二十歳の誕生日が目前に迫ったある夏の日。

夏樹は憂鬱な気持ちから思わず大学をサボってしまう。大学のある駅で降りずに、終点まで電車に乗ってしまった夏樹。そして彼女が辿り着いたのは、十年前、父の仕事の関係で嫌々後にした懐かしい町だった。そこで彼女は猫を探す少年に出会って――。
少女と少年の奇妙な猫探しの結末は――。

（前書き）

短編少女小説です。

Chapter 1: 19歳の憂鬱

《宮津——、宮津です。お降りの方は忘れ物のないように——》
車内アナウンスが響く。車内に乗っていた若者たちが一斉にドアに向かった。

一様にオシャレな姿の若者たち。みんな同じ系列の大学に通う者だろう。市内から外れた、本来なら若者がこんなに押しかけることなど有り得ない、ど田舎の町の駅。だからこの駅で降りる時点でうちの大学の系列の生徒でほぼ間違いない。

ドアがぶしゅーと音を立てて開いた。

どつと波のように若者たちが出て行く。私も行かなくては。

だけど私の足はまるで鉛のように重く、びくりとも動かなかった。電車の窓の外、はるか山の上にチラリと覗くチャペルの屋根。レンガ造りの建物たち、私の通う大学だ。

カーンカーンと遠くチャペルの鐘が鳴るのが聞こえた。

ヤバイ。早く行かないと遅刻だ。駅から学校までは坂道が続いている。どう急いでも20分は掛かるのに。

ぶしゅーとまた音がして電車のドアが閉まった。
学生の降りた車内は驚く程がらんがらんだった。

ガタンゴトン…と電車が動き出す。

あーあ。

私はため息を吐くと鞆からケータイを取り出した。

「ゴメン。今日なんか具合悪いから休むわ。教授に言っというて。〇」
「――＊）〇」

クラスメートにメールを送る。入学式の時に隣に座ってた子で、すぐ仲良くなった。私は一浪したからその子は一つ年下だったけれど、メールの返信はすぐ来た。

「わかった（＾－＾）／お大事にね！」

お昼をいつも二人で食べてたから、今日は一人にしてしまうな……。やはり悪いことをしてしまったかも。ちゃんと学校行けば良かった……。：

でも今から引き返すという気にはどうしてもなれなかった。

私はケータイをしまうと窓に頭を寄せた。

大学進学のために一人この京都に引っ越してきた。

以前京都に住んでいたことがあって、町は違うけれど、ある程度の勝手はわかっている。家賃は約七万の学生マンション。左隣の部屋の住民の話声が毎晩五月蠅いのが悩みだ。

大学はそこそこに楽しい。いや、楽しもうと努力してる。

本当に行きたかった大学には二度も落ちた。

母は二浪することを勧めたが私は滑り止めの学校に行く事に決めた。これ以上やったらって無駄だと思ったからだ。

勉強があまり好きではなかった。だが優秀な兄に囲まれた家庭において、私は優秀であることを求められた。

兄と同じ大学には入れなかったけれど、お嬢様学校ということで今の大学には入学することを許された。

兄の大学と同じ系列の女子大で、一浪して入る所ではなかったけれど、他に滑り止めは受けていなかったので仕方なかった。

文学部に入学して、周りは全員年下だった。

だから私は自分もストリートで入学したように振る舞った。小さな学部で二十人程度のクラスが設けられており、その中で年上だと知られたらきつと遠慮されると思った。浮いた存在にならなくて、私は嘘を吐いた。いや、ただ馬鹿だと思われるのが嫌だっただけかもしれない。

でも浮いた存在にはならなかったけれど、私の中で日に日にみんなとの年の差は重くのし掛かっていった。

みんなが私と普通に接する度に何かが私の中で鉛のようにのし掛かってくる。

浪人など珍しくない、難関大ならこんな目には遭わなかっただろうか。

やはりもう一年頑張れば良かったのだろうか…。

いつしか、私の中でそんな後悔にも似た気持ちが始生え始めていた。

初めて一人暮らしを始めたせいもあって私は色んなことが不安で、ただど学校には年下しかなくて、頼れる人がそばにいなかった。兄はサークルに入ることを勧めてきたけれど、もともと少人数の大

学なのでサークルの数が少なく、高校時代、進学コースだったせいで部活をしていなかった私が今更入れるようなサークルなんてなかった。

そして表面上はクラスメートと楽しく学生生活を送り、その実、鬱々とした毎日を過ごしている間に数ヶ月が過ぎ、あっという間に七月になった。

私の二十歳の誕生日が、迫っていた。二十歳——、世間で言う、成人だ。

七月二十一日。

明日は私の二十回目の誕生日だった。

私は窓に映る自分の顔を見た。

高校生によく間違われる童顔、肩に届くか届かないかというくらいの中途半端な髪の毛。

どこか不満げな目をしたガラスの向こうの私はいつも何も変わらなかった。

明日、私は大人になる。

何も変わってなんかないのに。

私は流れていく景色を眺めながら唇を噛み締めた。

誕生日が怖いと思う日が来るなんて、思いもしなかった。

子供ではいられなくなるということがどうしようもなく不安で、嫌だった。

大人になんかなりたくなかった。

幾つかの駅を通り過ぎ、いつの間にか車内には私しかいなくなっていた。

平日の午前十時。

驚くほど静かな空間だった。いつも私が乗車するときは学生でぎゅぎゅうなのに。

天気の良い日だった。

窓から差し込む陽光は明るく車内を照らしていた。

ふと見上げると、遠くに入道雲が浮かんでいた。

耳をすませば車輪の音に紛れてクーラーの空調の音が聞こえた。時間が止まっているかのような、穏やかでどこまでも静かな風景だった。こんなに居心地の良いのは久しぶりだ。

このまま、行けるところまで行ってしまうおう。

定期は使えないけれど、乗り越し精算してしまえばいい。そして私は目を閉じた。

Chapter 2：遠い日

《終点、終点です。当列車はこの駅で終点となります。乗客の皆様はお忘れ物のありませんよう——…》

終点のアナウンスに飛び起きた私は慌てドアへと向かった。いつの間にか眠っていた。

ホームには人はいなかった。ただ五月蠅いくらいの蝉の鳴き声が狭いプラットフォームに木霊している。

私はとりあえず階段を上ると改札口に出た。
精算機に定期を入れると不足金額を投入する。

改札をくぐるとき、駅員さんが胡散臭そうに私を見た。
童顔のせいかな、高校生が平日にうろついているとでも思われたのかもしれない。

私はそそくさと駅を後にすると、夏の日差しの照りつける外へと出た。

そこで初めて気がついた。ここは――……。

「うわー……懐かし……」

思わず呟き、私は知らず笑みを浮かべた。

そこは、私が幼少期に暮らした町だったのだ。

山に囲まれた、小さな町。

小学四年の夏に父の仕事の理由で後にした、懐かしいあの町だった。
いつも乗っている電車が、まさかここに続いていたなんて。

私は帽子を被り直すと歩き出した。

十年前の誕生日。一学期最後の日、引っ越したくないと泣いてだだをこねた。

当時私にはどうしてもここを離れたくない理由があった。

一つは引越し寸前になくなった飼い猫のルル。おいていくなんて絶対に嫌だったけれど、とうとう、最後までルルは見つからなかった。

もうひとつは――、好きな人がいたからだ。彼と離れたくなかった。
と言っても、片思いだったんだけど。

おそらく、私の初恋。告白しようと思ったけれど、言い出せずにずるずる先延ばしにしている間に最終日になって、でもよりによって彼はその日、学校を休んでしまった。わざわざ家まで訪ねたけれど、留守で、結局、告白できないまま私はこの地を後にした。

とまあ、そんなワケでわたしは十年前、めちやくちや駄々をこねたのである。

だけど子供の言い分が聞き入れられることはなく、いつか帰ってくると誓い、そのまま十年もの間訪れることはなかった。

大学を京都にしたのは、この町にいつか戻りたいと願っていたからで、でも大学生活に追われて、今までそれを実現できていなかった。

私は自然と歩き出した。

山あいの緑の濃い町。

都会よりも少しだけ酸素の濃い空気が私の記憶をより鮮やかに再生させた。

良く友だちと行った市民プール、ピアノの先生の住んでいた家。

夏休みにラジオ体操をした大きな広場のある公園に、よく塾の帰りにアイスを買って帰ったコンビニ。

目に飛び込んでくる懐かしい景色に、目眩にも似た強烈な懐かしさがこみ上げてくる。

ここは夏の眩しい太陽のように鮮烈な思い出の詰まった場所だ。仲が良かった友達も好きだった男の子も大好きだった飼った猫も、みんなみんなここに置いてきてしまった。

私は歩き続ける。

散らばった思い出を拾い集めていくように。

Chapter 3：探し物

「ねえ、その美人なお姉さん」

急に後ろで声がした。

私は少しびっくりしながらも条件反射的に振り向いた。

ほとんど真後ろにまだ小学生くらいの男の子が立っていた。日に焼けた小麦色の健康的な顔に真っ白い歯をにかりとさせて、少年が笑った。

「お姉さん自分のこと、美人だと思ってるんだ？」

「……」

なんなのこの子。

随分前に一時期流行った引っ掛けだ。

そのカワイイお嬢さんとかなんとか後ろから呼ばれて思わず振り返ってしまうとナルシストだとはやし立てられるという……しょーもないイタズラ。今でもこういう馬鹿馬鹿しいことしてるのね、小学生って。

私はため息を吐くと少年に背を向けた。

すると少年が焦ったように私を引き止めた。

「わー！ ウソウソ！ お姉さんは美人だよ！ ちょっと丸顔だけ

ど。でもそこがカワイイって言うか」

「一体何の用なの？」

自分でも気にしている子どもっぽい丸顔を他人に指摘されて私は内心力チンときた。

不機嫌に尋ねると、だが意外な事に割とまともな答えが帰ってきた。

「お姉さんネコ見なかった？」

「ネコ？」

「うん」

少年は頷くとそのツンツン跳ねた髪の毛をぐしゃぐしゃと掻いた。

「友だちの家のネコなんだけど、俺逃がしちゃって。三毛猫で、こんとこに黒い斑点がついててちよび髭みたいになってて、残念な顔した奴なんだけど」

少年がカトちゃんペをしてみせた。

昔私が飼っていた三毛猫、ルルにも同じ特徴があった。私はなんとなくルルまでもが侮辱されたような気がしてムツとした。おざなりに首を横に振る。

「悪いけど見てないわ」

「そっか……」

少年が目に見えて落胆した。

活発で明るい印象であるだけに、何だか酷く可哀想な事を言ってしまったみたいに思えて、私は少し自分の態度を反省した。幾分柔らかく少年に尋ねてみる。

「いついなくなったの？」

「3日前……」

「もしかしてそれからずっと捜してる？」

今日が平日だという事を思い出して私は眉をひそめた。

少年が顔を背けた。そして唇をとがらせ、意固地な態度で開き直る。

「悪い？」

「悪いわよ。学校は？ 小学生でしょあなた」

「学校なんかよりチョビの方が大事だ！ チョビはもうヨボヨボのジジイなんだ！ ほっといたら死んじゃうよ！」

少年の必死の剣幕に私はたじろいだ。
すると少年が私の腕を不意に掴んだ。

「な、何？」

「そっぴえばお姉さんさんこそどうしてこんな真っ昼間にこんなところにいるんだよ？」

うっ。

「お姉さんも学校サボってんだろ！？ 俺のこと責める資格なんてないね！」

「ちっ違うわよ！」

私は慌てて言い訳をした。

「大学は義務教育や高校みたいに毎日行かなくてもいいの。単位さえちゃんとやりくりすれば……」

「お姉さん大学生なの？」

胡散臭さそうに少年がじっと私を見上げた。

「子どもっばいから中学生かと思った」

「ちゅっ!?!」

私は語気を荒上げようするも、急に身を乗り出してきた少年にそれを阻まれた。

「じゃあさっ、お姉さんチョビ探すの手伝ってよ」

「え？」

少年が私の両手をガッチリ掴んでにっこり微笑む。

「な、なんで私が」

「え？　だってお姉さん暇なんですよ？」

どうして暇だと決めつけているの？

「だってこんな田舎でお姉さんみたいな若者が何か用があつて来るわけないだろ」

——…確かに

「なあ頼むよ。俺どうしてもチョビを今日中に見つけなくちゃいけないんだ」

「どうして？」

あんまりな焦り方に純粹に不思議に思つて尋ねると、少年は唇をかみ締めた。やがて、搾り出すような声で彼は言った。

「その友だち——、チョビの飼い主、今日で引つ越すんだ」

引つ越す。

私は思わず声を詰まらせた。

「遠くなの？」

私の問いかけに、少年は力なくうなだれた。

私は十年前の自分のことを思い出していた。いなくなつてしまった飼い猫を置いていかなければならなかつたつらい記憶が、まざまざ

と蘇る。そして、今まさにそれと同じ状況にある、少年の友だちに同情した。

「——わかったわよ」

私はひとつため息を吐くと、少年を見下ろした。

どうせこれから何をしようと考えていたわけではない。それならば猫探しくらい手伝ってあげたっていいだろう。何より、猫を逃がされてしまった子のことを考えると、手伝わないではいられなかった。

「一緒に探してあげる。私、さんじょうなつき三条夏樹よ。あなたの名前は？」

少年は嬉しそうにガッツポーズを決めると満面の笑みで答えた。

「一郎。すずきいちろう鈴木一郎だよ」

鈴木一郎。一瞬偽名かと思うほどありふれた名前だった。

鈴木は日本で一番多い名字で一郎は日本で最もありふれた名前の一つ。実際同姓同名が何人いるかもわからないだろう。メジャーの某超有名野球選手然り、私の小学生の頃にも同姓同名の子がいたくらいだから。そういえば、顔もなんだかその同級生に似ている気がする。

「あなた、もしかしてお兄さんいる？」

「え。いないけどなんで？」

確かに同じ名前なんてつけるわけないか。

「いや、いいの。ちよつと同じ名前の知り合いに似てたものだから……それで、チヨビはどこでいなくなったの？」

私は浮かんだ疑念を振りとばすように頭を振ると、一郎に尋ねた。

一郎は道端の草や電柱の陰を入念にチェックしながら何故か言いにくそうにもごもごした。

「え？ なに？」

私が追求すると観念したように一郎が答えた。

「……学校」

私はわけがわからずに一郎を見た。

学校？

「生き物は持ち入り禁止じゃないの？」

「……そうだけど」

一郎はまた唇を尖らせた。彼のその様子に私は何かあるなとピンときた。

「……友だちのネコって言ってたけどその友だちはもちろん知ってるのよね？ チヨビが行方不明になった理由」

私の問いに一郎が思い切り顔を背けた。

呆れた。

私はため息を吐くと腰に手を当てて一郎を見下ろした。

「一体他人様の家のネコを学校でどうするつもりだったのよ？」

「……別に夏樹には関係ないだろ」

ブスツとした声で一郎が言った。

ム力。っていうか、夏樹って呼び捨て？ 年下のクセに。

「あっそう。じゃあ関係ないなら私帰るわよ」

背を向けた私にえっと一郎が顔を上げた。

「……わかったよ！ 話すよ！ ……本当は言いたくなかったけど……知る権利はあるもんな」

一郎はタンクトップの襟を引っ張って額に浮いた汗を拭くと私に向き直った。

「実験したかったんだ」

「は？」

「ネコは泳げるのかどうか。夏休みの自由研究の課題」

「……」

「で、学校のプールで泳がせてみようって思って。身近でネコって

言えば隣の家のチョビくらいだったから」

私は額に手をやり呻いた。

小学生男子ってどうしてこういう馬鹿な事をするんだろう。

「でもプールで泳がすなんて言ったら絶対貸してもらえないだろう？
だからチョビがベランダで外気浴してる間にかっさらったんだ
だけ」

隣同士だからお互いのベランダには飛び移れるから…と一郎は言った。

「でもいざ泳がそうとダンボールの蓋を開けた途端、チョビの奴
すごい勢いで飛び出して行って」

それっきり。

私はため息を吐くとしよぼくれている一郎に言った。

「ならこんな所よりも学校周辺探した方がいいんじゃない？ 探
したの？」

「一応…でも見つからなかった。だからこっちのほうまで来てるか
もって範囲広げてみたけど…」

だんだん尻つぼみになっていく少年の声。

どうやらかなり反省はしてるようだった。
確かに、学校を休んでまで探しているのだ。相当責任を感じている
のだろう。ならばこれ以上咎める必要はない。

「でも変ね」

私は少年から視線を外すと夏の目の覚めるような青い空を見上げた。

「動物つて帰巢本能があるはずだからほっといても戻ってくるはずなんだけど」

どこかで遊んでいるとしても三日は長すぎる散歩だ。

しかもこの夏の暑い日差しの中、水や食料なしでぶらぶらし続けるのはさすがにないのではないか？

「どこかの家に拾われちゃったのかも……」

一番考えられる可能性はこれだろう。

しかし一郎は頭を振った。

「チョビは不細工なんだ。しかももうヨボヨボだし、誰も拾うけないよ。それにもし拾われたら拾われたで、チョビはちゃんと住所と電話番号と名前付きの首輪付けてるし。けどなんの連絡もないし」

うーん。

「じゃあ……何か家に帰れない状況になってるとか……どこかに閉じ込められてるとか」

「どこかって？」

「人目に付かない所じゃない？ 三日も誰も見てないなら……穴の中とか立ち入り禁止の所とか」

すると少年が思いついたように顔を上げた。

「旧校舎……！」

「え？」

「そう、そうだよ！ チョビは旧校舎の方へ走って行った……。鍵は閉まってるけど一階の窓ガラスに割れてる所がある……！ もうすぐ取り壊しだから立ち入り禁止になってて誰も入れないし……」

「旧校舎って桜庭小学校の？」

私が聞くと少年が頷いた。

「うそ。あの校舎まだあるの？」

確か私が通っていた頃にも取り壊しの話が持ち上がっていたのに、まだ壊していなかったのか。

「夏樹、行こう。チョビはきっと入ったは良いけど出られないんだよ」

「でも立ち入り禁止なんですよ？」

すると一郎は最初に見せたようなあのイタズラっぽい笑顔を浮かべて言った。

「もちろん忍び込むんだよ」

そう言つて走り出す。全く……見つかったらどうするのだろう。あなたは在校生だから良いけど私はただの不審者になるじゃないの。だが私は内心あきれながらも、気がつけば一郎の後を追いかけて走り出した。

Chapter 4：猫を探して

私が五年生の一学期まで通った小学校はあの頃と何も変わっていなかった。

真新しい鉄筋コンクリートの校舎が四棟。そしてその裏手につつそりと佇む煉瓦造りの旧校舎。

運動場には野球部の子供たちが練習をしていた。

ファイおーっ ファイおーっ とかけ声を上げながらグラウンドを走っている。ミッション系女子大ではまず見られない汗臭そうな光景。

だけど不思議な懐かしさを感じて私は思わず笑ってしまった。

「野球部がどうかした？」

一郎が私を見上げて不思議そうな顔をした。

「うっん。ただ……なんかこういうの懐かしいなって」

私は校舎を振り返ると目を細めた。

「ほんと……懐かしいよ」

あの頃の記憶はもう遠い過去となって薄れていく一方だったけど、こうして今この場に立ってみると容易に蘇ってくる。詳細な出来事の記憶ではなく、あの頃感じたさまざまな感情たちが。

楽しいことばかりではなかった。だけど今のように、足元が覚束ない漠然とした不安感や、何かに渴望しているような、満たされない思いは抱いたことはなかったように思う。

私は世界を信じきっていて、私自身のことにも信じきっていた。

変わらない毎日を
変わらない自分を

あの頃の私が今の私を見たらどう思うだろう。
こんな未来は嫌だと思っただろうか…。

「夏樹なにしてんだ行くぞ」

一郎が旧校舎へと向かいながら立ち止まっていた私を呼んだ。
私は頷くと、歩き出した。今は猫を探さなければ。

Chapter 5：旧校舎

「どうやって入るつもり？」

旧校舎の玄関には鎖が巻きつけられ、南京錠で施錠されていた。
いくらなんでも鍵を破壊してはいるわけにはいかない。いよいよ犯

罪者になってしまふ。

「こっち」

一郎が私を手招き校舎の横手に連れてきた。

「ここ、手を突っ込めば鍵を中から開けられない？」

一郎が言っていた通り、一階の廊下の窓ガラスの一枚が割れていて、直径50センチくらいの穴が出来ていた。

「でも鍵に手が届かないよ」

外からだ窓の鍵部分は高い位置になっていた。背伸びしてみるのが届かない。

「じゃあ夏樹肩車してよ」

一郎が何でもない事のように言った。

「ええ？」

私は思わず眉をしかめた。

「そんなの無理よ。あんた何キロよ」

「三十二キロ」

「軽っ！」

「だろ？」

しまった。

一郎がにやりと笑って私の肩を掴んだ。

思わず突っ込んでしまった。

だって三十二って、男の子なのにそんなのアリ？

十キロ以上違うんですけど。身長は五センチくらいしか変わらないのに。

「ほらほら屈んだ屈んだ」

一郎に頭をぐいぐい押さえ込められ私は思わず屈んでしまった。その瞬間を逃すことなく、一郎が私の肩に飛び乗った。

「もおーなんで私がこんなこと……」

「大体わざわざ窓開けるのは夏樹のためなんだぞ。俺ならそのまま潜れるけど夏樹はサイズの無理だから。このくらいして当然だろ。ほらちゃんと足支えといてよ」

一郎が私の頭に手を置くとえらそうな口振りで言った。

「ハイハイ」

仕方なく私は日に焼けた一郎の健康そうな小麦色の足を掴んだ。

一郎が手を伸ばし、穴の中に手をつっ込んだ。

伸びをして鍵へと触れる。

だがなかなか鍵が回らない。

「ちょっと早くしてよ」

いくら軽いと言ってもうら若い乙女が男の子を肩車し続けるのはツライ。

「わかってるよ。でも固い んだよこの鍵……錆び付いてて…わあっ！」

一郎が一際力んだ時、不意に鍵が回った。だが力んだ反動で一郎は大きくバランスを崩した。

「きゃっ……」

一郎につられて私もバランスを崩す。

そのまま私たちは土のにおいのする地面へと倒れ込んだ。

「いったあー……っ」

しかも重い。

一郎が覆い被さるように私の上に倒れていた。

「いてて……夏樹大丈夫か？」

「もう大丈夫じゃないわよ。転けたのなんて数年ぶりよ。全く……」

私が悪態を吐くと一郎がクスクスと笑った。

「……何よ」

笑われた意味がわからず困惑した私を不意に一郎が目を細めて見つめた。

大人みたいな目だった。

私は急に自分でも訳が分からずにドキリとした。

「……鼻、擦りむいてる」

そう言うとい郎が私の鼻に唇を寄せるといきなり舐めた。

まるでキスするような仕草で、というかキスなんだけど、いやでも鼻だしとか色んな考えがグルグル頭を巡るも、混乱し過ぎて私は動けなかった。いや、硬直していたと言った方がいいかもしれない。

一郎の長い睫が間近に迫る。

日焼けした肌と子供っぽい表情で誤魔化されていたが、意外なくらい整った繊細な造りの顔。記憶の中のよく似た少年と重なって息が止まりそうになった。

ようやく声が出せるようになったのは、一郎が起き上がった後だった。

「夏樹？ 大丈夫か？」

一向に起き上がらない私に一郎が不思議そうに尋ねた。

「あんた……なにすんの……」

茫然としながら呟く私に一郎がまた不思議そうに首を傾げた。

「何って？」

「な、舐めたでしょ……！」

私はガバツと起き上がり、自分の鼻を指差した。

「だって怪我してたから、唾付けとけばいいって言うじゃん」

「だからってフツ―舐める?! あんたは犬猫かつ!」

「なんでそんなに怒るんだよ?」

一郎が不思議そうに訊いてくる。

「なんでって……」

私は不思議そうな顔の一郎と向かいあうとしばし沈黙した。

「……あんた何才?」

「九歳。今年で十」

……九歳の子供にギアアギア言う方がおかしかったのかもしれない。

私はうなだれるともういい、と呟いた。

「……鍵は開いたし、早く行きましょ……」

「なんなんだよ一体」

「いいのもう気にしないで私がバカだったの!」

一気にまくし立て私は鍵の解除された窓を押し開けた。

Chapter 6：真実

旧校舎の中は夏にもかかわらずひんやりとした空気で満ちていた。

「ここにはいないみたいだね」

私はキョロキョロ辺りを見回しながら一郎に言った。

「どこかに隠れてるのかも。あいつ臆病だし」

一郎が私を振り返った。

「とりあえず、手分けして探そう。俺は東側、夏樹は西側を探してくれ」

「わかった」

私は一郎と別れると、あちこち目を巡らせながら廊下を進んでいった。

「チョビー、チョビーいないのー？」

呼んでみるが猫の姿はどこにもない。

本当にここにいるのだろうか。

ひとつひとつ教室を確認していきながら私は小さく息を吐いた。

そういえば昼ご飯食べてない。

一郎は平気なのだろうか。旧校舎の搜索が終わったらコンビニにでも行ってパンか何か買おうか……。そんなことを考えていると不意にガタンとどこから何かにぶつかったような音が聞こえた。

「……チヨビ？」

私は音がした方へと歩いていった。

ギシギシと確かに自分以外の何かが歩いている音がする。

だがふと私は一抹の不安を覚えた。というのもその足音がどうやらひとつではなさそうだったからだ。しかも猫にしては重たい足音。

私は廊下の壁に背を張り付け、しばし様子を窺った。猫じゃないとすればそれは人間だ。立ち入り禁止なのに入ってくるということは用務員さんかそれとも教員か――。

まずい。

忍び込んだ事が誰かにバレたら絶対お咎めをくらう。

ギシギシと足音は近付いてくる。

緊張のあまりバクバク心臓がうるさく音を立てる。どこかに隠れなきゃ。でもどこに？ とりあえずここから離れなきゃ。

私は回れ右して角を曲がろうとした。

だが、角を曲がった途端思い切り誰かにぶつかった。

「きゃっ……！」

「うわっ……！」

反動で尻餅をつく。

「ごめん。大丈夫だった？」

私はぶつかった相手を見上げた。

たぶん同じ年くらいの男の子だった。

黒のシャツにカジュアルな布地でできた肩掛けカバン。

わざと散らしている茶色っぽい髪は前髪が少しだけ長かった。

どこかの大学の学生だろうか。とにかく先生じゃないの確かだ。
私はちよつとほつとすると男の子に頭を下げた。

「私こそぶつかっちゃってごめんなさい」

だが私の言葉には反応せず、男の子はじーっと私の顔を見ている。

「あの……何か？」

「もしかして三条？」

男の子が不意に言った。

え？

「どつして……」

名前を？

ぽかんとして顔を見上げる私に、男の子は嬉しそうに顔をくしゃつとした。

「やつぱり！ うわー、三条全然変わってねえのな！ 覚えてない？ 俺だよ。陣内。じんない小四ん時同じクラスだった…」

「陣内……陣内くん？」

記憶の中のスポーツ刈りのサッカー少年と今の私立大学生的な洒落た姿がなんとか重なる。

「うそ。すごい久しぶり……」

「三条こそ、めっちゃ久しぶりじゃん。元気だった？ 途中で転校したじゃん。どこだったけ？ アメリカ？ イギリス……なんか外国だったよな」

「ドイツだよ。パパが病院転勤になって……」

「そうそう。ドイツ！ 今も向こうに住んでんの？」

「ううん。三年前に帰国してそれから東京で暮らしてた。今は京都の大学に通ってる。陣内くんは？」

「俺も今大学生。へーでもそうか……。三条戻ってきたんだな……」

陣内くんが人懐っこい笑みを浮かべた。そういう表情は小学生の頃と同じで、私も思わず笑みをこぼした。

「でも……なんで陣内くんがここにいるの？」

ひとしきり再会の余韻が過ぎた後、私は一番不思議に思っていたことを訊いた。すると急に陣内くんの表情が陰った。

「……三条は？」

問い返されて私は怪訝に思いながらも応える。

「私は猫を探してたの。男の子から頼まれて……そうだ、陣内くん三毛猫見なかった？ 鼻の下に黒い斑点のある……」

話していくにつれて陣内くんの顔が強ばっていった。

訳が分らず困惑する私に陣内くんは青い顔のまま小さく首を振った。

「いや……」

「そう……」

なんだか妙な沈黙が起こった。

「……あの……さ、三条……」

気まずい沈黙にどうしようか困っていると、ようやく陣内くんが口を開いた。

「夏樹？」

その時、後ろで声が上がった。一郎だ。私は振り返ると笑顔で彼を迎えた。

一郎はじつとこちら見ていた。

「一郎。もう向こうはみんな調べたの？」

「一郎……？」

陣内くんが遠慮がちに私に問いかけた。

「ああ、この子だよ。私に猫探すの手伝ってくれて頼んだの。鈴木一郎くん。一郎、こちらは私の小学生時代の同級生の——……」

「三条……」

陣内くんが何か異質なものを見る目で私を見た。

「誰に話しかけてんの……？」

え？

私は陣内くんを振り返ると訳が分からず首を傾げた。

「だれって——……」

私は一郎の方を見た。一郎は私を通り越して陣内くんをじっと見つめていた。

「この子だよ。一郎くん」

私は一郎を指差した。

「誰もいない」

陣内くんが囁くように呟いた。

「誰もいねえよ」

私は陣内くんがふざけているのだろうと思った。

「やだな。やめてよ、もう。ただでさえ、旧校舎って不気味なんだから。ふざけないで……」

その時、場違いな明るい声が響いた。

「あつ、陣君じゃーん」

「おひさーっておお？！ 陣君が女の子連れてる……！」

「なにい？！ どーいうことだジーン……！ 彼女イナイ同盟を貴様裏切ったのかかぁ？！」

金髪の短い髪の少年と、赤のフレームメガネを掛けた理知的な少年が廊下の向こうからやってきていた。おそらくさっきの足音の主だ。

「ってなんか緊迫ムード？ もしかして修羅場だった？」

「全く……陣君。こんな所に女の子なんか連れてこないでよ。不謹慎だよ」

「違うって。彼女、三条だよ。三条夏樹」

陣内くんが二人に向かって弁明すると、二人はさつとあからさまに顔色を変えた。

「三条？ あの転校した三条？」

フレームメガネを掛けた少年がこちらに歩いてきながら私にぺこりと頭を下げた。

「久しぶりだね。三条さん。梅宮^{つめみやてつ}哲です」
「梅宮……くん？」

思い出せない。
いたような気がしなくてもないが……。

「俺、^{あなた}眞田。っても覚えてないだろうけど。同じクラスなったことないし」
「は、はあ」

でもだったらなんで彼らは私のことを知っているのだろう――。

「俺たちサッカー部だったんだ。サッカー部じゃ、三条さん結構有名だったから」

眞田くんが懐かしむように目を細めた。
梅宮くんが頷く。

「そう一郎が三条さん三条さんっていつつも言ってたから」

「いち……ろつ……？」

私は思わず一郎を振り返った。
一郎は前を見据えたまま動かなかった。

私の心臓がどくとひとつ強く跳ねた。

「でもどうして三条さんがここにいの？ 陣君が呼んだの？」

眞田くんが陣内くんに問いかけた。陣内くんが困ったように首を振る。

「いや……三条さんはたまたま……」

陣内くんが私を窺うようにチラリと見た。

「ふうん。でも偶然でもきつと一郎喜ぶよ。もう最近は特に仲良かった俺たちくらいしか来てやれなくなっただけ……」

「喜ぶって……？」

喉がいやに乾く。はりつく喉を無理やり動かして私は尋ねた。すると眞田くんが金髪をかき上げながら静かに言った。

「ここは、一郎が見つかった場所なんだ」

梅宮くんが淡々とした口調でそう言った。

「覚えてるでしょ？ 鈴木一郎。君の隣の家に住んだ……、いつもイタズラばかりしてた奴……」

覚えてる。鈴木一郎。小学校時代の同級生。いつも私に意地悪ばかりしていた、クラスのリーダー格だった少年。忘れるわけがない。だって私は――……。

「三条さん、外国に転校しちゃったから、知らなくて当然だけど、

君が転校してすぐ一郎、行方不明になって……」

梅宮くんが相変わらず淡々とした口調で語っていく。

「真夏の旧校舎の倉庫の中で。たぶん誤って鍵が閉まったんじゃないかって。当時既にかなり老朽化してたから……。発見されたのは行方不明になってから二週間以上経った後で……。業者の人が見つけたんだ。それから取り壊しの工事が中止になってそのまま今まだ工事されてない。だから毎年この季節になると俺たち特別にここに入れてもらってあいつに会いに来るんだ……」

梅宮くんがそこで一旦言葉を区切った。そして彼はしばし迷った後、意を決したように口を開いた。

「なんで一郎が立ち入り禁止の旧校舎に入り込んだのか、どうやって入り込んだのか……。……本当の所はわからない。でも……。あいつがいなくなる前、あいつ、ずっと猫を探してた。学校を休んでまで、私は思わず梅宮くんを見た。
フレーム越しの梅宮くんの目はどこまでも静かだった。

「……君の猫だよ。——いなくなっただでしょ。あれ、実は一郎が勝手に持ち出して逃がしちゃったんだ。だから一郎は君が転校する前になんとか見つけなくっちゃって……」

私はひゅつと息を詰まらせた。ずっとルルは自分で出て行ったのだと思っていた。猫は死期が近づくどこかへ行ってしまおうとパパもママも言っていた。だから、納得しきってはいなかったけれど、ルルもそうなのだと思っていた。

「このこと、三条さんにずっと知らせたかったんだ……。一郎のためにも……。あの頃は、海外に引っ越しちゃったからどう連絡とればいいのかもわかんなくて……。できなかつたけど……一郎は君に謝り

たいと思つてただろうから……」

眞田くんが私の方へと身を乗り出して叫んだ。

「三条さん、君にしたら許せないことかもしれないけど、あいつ本当に後悔してたんだよ！ 三条さんがもういなくなるっていうのに学校を休んでまでチョビを探し回って……あいつは本当に必死で……！」

「……知つてる……」

私は震える声で呟いた。

「え？」

眞田くんたちが意表をつかれたように私を見た。だけど私は構わず

一郎を振り返った。

一郎はまだそこにちゃんといた。

本当は初めて会った時から引つかかっていた。彼は一郎くんに似ている。似すぎている。でもあの頃の姿のままということに惑わされて気づけなかった。

私は一郎の方へと足を踏み出した。

「……一郎くん」

一郎の肩がぎくつと揺れた。

「一郎くんなの……？」

一郎の瞳が大きく揺れた。

「……ずっとルルを探してくれてたの……？」

一郎が一步後ずさった。と思ったら、ぱつと身を翻すと走り出す。

「一郎くん……！」

私は彼の後を追って駆け出そうとした。だが腕を強く掴まれ、ガクンと膝をつく。

「三条さん……！」

陣内くんだった。

私は彼の腕を逃れようともがいた。

「放して！ 一郎くんが！ 一郎くんが行っちゃう！」

「だから一郎は死んだんだよ！ 十年も前に……！ 三条さんちよつとおかしいよ？！」

「ちよつとちよつとどういうこと？」

眞田くんが陣内くんと私の間に慌て入った。

「一郎がいるって言うんだよ……！」

陣内くんが息を上げながら、それでも私の腕を放さずに眞田くんに向かつて言った。

「いたもん！ あの頃の姿のまま……ずっと探してたんだよ……！」

「探すって……チヨビを？」

梅宮くんが戸惑いがちに呟く。

その呼び名にますます私の中で確信が固まった。チヨビ。一郎くんたちは、ルルのことをそう呼んでいたのだ。

「本当なの……！　一郎くんなんだよ……！　ベランダにいるところを攫ってこっそりプールで泳がせようとして逃がしちゃったって言うてた……！　そうなんでしょう？！」

私の腕をつかんだ陣内くんの手がびくりと震えた。

「なんで、それを……」

答えはそれで十分だった。

「私行かなきゃ……一郎くんはずっと探してるんだよ……あの時のまま十年も……！」

私はとつくの昔に諦めてしまっていたのに。一郎くんはたった一人で、十年も——、死んでからもルルを探し続けていたなんて——。それを思うと、ひどくやるせなくて、苦しくて、居ても立ってもいられなかった。一郎くんを追いかけなきゃ。一郎くん——。

「……チヨビは学校の近くで牽かれてたらしい。詳しい場所はわからないけど……一郎が逃がしたすぐ次の日に遺体进行处理したって」

急に梅宮くんがぼつりと呟いた。

私は目を見開いて梅宮くんを見つめた。

「一郎のことがあった後、調べたんだ。役所に問い合わせて」
「おい……哲……」

陣内くんの言葉を制して梅宮くんが私を真っ直ぐ見据えて言った。

「行つてあげて」

陣内くんの手が力なく私の腕から放れた。

「……ありがとう」

私は小さく呟くと走り出した。

Chapter 7：少年を探して

校舎の外にはいつのまにか夕暮れが迫っていた。気が付かなかったけれど、随分長い間私たちは一緒に猫を探していたのだ。

私は校庭に走り出ると、少年の姿を探して辺りを見回した。一郎くんはルルを探していた。ならば、ルルが死んでいたという、その場にいるのではないかと思った。でも、「この近く」だけkではあまりに漠然としていてわからない。私は焦りを覚えながらひたすらあの快活そうな少年の細い背中を捜した。早く見つけなければ、一郎くんが消えてしまう気がした。

校庭は異様な程静かだった。

練習をしていたはずの野球部員ももういない。

人っ子一人いない校庭は少し異質で妙な不安をかき立てた。

「一郎くん……」

私は自分を奮い立たせるためにも、彼の名を呼んだ。
すると不意にチリン……と遠くで鈴の音のような音が聞こえた。

チリン…

チリン…

まるで誘うようにその音は鳴り続ける。

「一郎くん……？」

私は音のする方へと引き寄せられるように歩き出した。校庭を抜けて外へ向かう。

チリン…

国道沿いの道を歩きながら、私は不意に気がついた。
車が一台も走っていない。通行人も、カラス一匹さえ、いない。
さっきの校庭と同じように、いるべきはずのモノがそこにいない。

チリン……！

思わず立ち止まったその時、一際強く音が鳴った。まるで急かすように。

そうだ。

今は立ち止まっている場合じゃない。前に進まなくちゃ。

「一郎くん……！」

きつとこの先に一郎がいる。

不思議な確信を持って私は走り出した。

Chapter 7：ソーロンググッバイ

一郎くんは国道沿いの道の真ん中で一人佇んでいた。おそらく――、ルルが轢かれていた場所だ。

夕闇で彼の後ろ姿は陰っていて、私は今にも掻き消えてしまいそうだった。

「全部思い出した……。俺、とっくの昔に死んだ」

ぼつりと一郎が振り返らずに言った。

「なのになんと往生際悪くさまよってたなんて……。十年も……。笑っちゃうよな」

私はじつと一郎の後ろ姿を見ていた。

「俺さ、チヨビが――……。ルルが車に惹かれて死んだの、知ってたんだ。探し回ってる途中にちょうどこの場所でルルの体を役所のおじさんが持つてく所、見たから。でも認めたくなくて、きつとあれはルルじゃないって自分に言い聞かせて、闇雲に探し回った……。もうどうしようもないってわかってたけど……。それでも諦めたくなかった……」

一郎くんが振り向いた。

彼は笑っていた。

泣き出しそうな顔で笑っていた。

「三条……。ルルが死んだの、俺のせいなんだ」

違う。

一郎くんのせいなんかじゃない。

ルルが牽かれたのはきつと不幸な事故だったのだ。誰のせいでもない。

だけどそう思っても言葉が出てこなかった。

「でも俺、どうしても本当のこと言えなくて……。お前がすっげールル可愛がってんの、知ってたし、お前に嫌われるのが怖かったんだ……」

一郎くんはふつと息を吐き、目を細めて私を見た。

私の心臓がどきんと跳ねた。ああまただ。彼は時々とても大人びた目をする。

「……俺、お前のこと、好きだった」

一瞬何を言われたのか、わからなかった。ただ、胸が早鐘を打つように跳ねる。

「でも全然素直になれなくて、いつもお前に意地悪しては自分の気持ちを隠してた。お前は俺なんか嫌いだったろ」

一郎くんが苦しそうに笑いながらそう言った。

私は震えながら首を横に振った。

嫌いだなんて、思ったことはなかった。

一郎くんはいつも明るくて、みんなに好かれてて、クラスの中心だった。

私にはイタズラばかり仕掛けてきたけれど、内気でなかなかクラスにとけ込めないでいた私を輪の中に入れてくれたのは一郎くんだった。

「私……一郎くんのこと好きだよ」

自分でも驚くくらい素直にその言葉は出てきた。

「ずっと一郎くんのが好きだったよ……」

一郎くんの顔から笑みが消えた。

私は一郎くんの方へ足を進めた。

一郎くんは一瞬ぎくりと肩を揺らしたが、私は構わず一郎くんに抱きついた。

小柄な私よりも更に低い身長。細い体。一郎くんの体は子供のままだった。

「……お前が転校するって聞いた時、すごく悔しかった……」

一郎くんがぐぐもった声で呟いた。

「もっと自分の気持ちに素直でいれば良かったって……。みんなにからかわれたってそんなのどうだっていいことだったのに……。行かないでくれて言いたかったけど、俺はガキで、そんな簡単なことすらできなかった」

一郎くんが自虐的に笑った。

「どうせ小学生のガキがそんなこと言った所でどうにもならないってわかってたけど……。全部俺がガキだったから、何もかも思い通りにいかなかった……。俺は……。大人になりたかった」

泣いて転校したくないと駄々をこねた。

でも私たち子供の声は無力で、どうしようもなく無力で……。いなくなった猫を待つことも好きな人の傍にすることも許されなかった。

そうだ。あの頃の私は早く大人になりたかった。

父の都合で理不尽にこの地を離れなければならなかったことが嫌で嫌で、何を言っても相手にしてくれない大人たちに腹が立って、悔しくて――。

私たちは、大人になりたかった。

大人になって一緒にいたかった。

そしてようやく今、それが叶うまでになったのに、彼はもう大人にはなれない。

どうしてだろう。

どうしていつも、思い通りにならないんだろう。

「……三条……」

小さく嗚咽をあげた私の背中に、一郎くんの細い腕が回った。一郎くんが小さく呟く。

「……このまま俺と――……」

チリン……！

一郎くんの声を遮るようにあの鈴の音が強く響いた。

一郎くんがはつとしたように顔を上げた。

彼は私の背後に目を向けると、目を見開いた。

「チヨビ……！」

え？

一郎くんは私の腕からすりとり抜けると、ぱつと駆け出した。

「チヨビ……！」

チリン……

鈴の音が声に応えるように鳴った。

一郎くんが片膝を着いて両手を差し出した。

次の瞬間、一郎くんの腕の中には鼻の下に斑点がついた三毛猫がいた。

「ルル……！」

私は我を忘れて一郎くんに駆け寄った。

「ルル……ほんとにルルなの……っ？ どうして——……」

じゃあ、私をここに連れて来たあの鈴の音は——……。

私の体が知らず震えた。

いつから？

いつからルルはいたの？

まさかルルも一郎くんのようにずっと彷徨ってたの……？

一郎くんの腕の中で気持ちよさそうに目を細めているのは、紛れもなくルルだった。

一郎くんが不意に笑った。

「なるほどな……いくら探しても見つからないわけだよ」

「え……？」

私は意表をつかれてぽかんとした。
どういうこと？

一郎くんが笑いすぎて涙目になりながらルルに言った。

「お前……ずっと三条の所にいたんだな」

「私の……所……？」

一郎くんが頷いた。

「ルルはずっとお前と一緒にだったんだよ。この町をいくら探たって見つかるわけなかったんだ」

一緒にだった？

ずっと私と――

一郎くんが微笑んで私の方を見た。
不安を掻き立てる程穏やかな笑みだった。

「……やっとお前に謝れる」

一郎くんが私に向き合うつと、その腕の中のルルをそつと私に差し出した。

「ごめんな、三条。勝手に猫持ち出して」

私はゆつくりとルルを受け取った。

柔らかい、ルルの毛並み。琥珀色のまん丸い目。あの頃と何も変わらない。まるまる太った体に、何より、あの間の抜けたちよび髭のような鼻の下の斑点模様。だっこされた時に甘えるように目を細める仕草も、全て……。ルルだ。ああ、ルルだ。本当に、ルルだ。

私はぎゅっとルルを抱きしめた。
ルルは甘えるように喉を鳴らした。

「ありがとう……一郎くん……」

私は涙でこもった声でなんとかお礼を言った。

「礼を言われる筋合いはないよ」

「それでもありがとう……ルルを見つけてくれて」

一郎くんがああ、悪戯っぽいあの顔で笑った。私もつられて笑う。

一郎くんが眩しそうに目を細めた。

「三条……、やっと笑ったな」

「え？」

「嫌なことか思い通りにならないこととか沢山あるけど、やっぱり生きてるっていいな。あの頃は、またお前がこの町に帰ってくるなんて思いもしなかった。でも今こうしてお前はここにいる……。笑ってる……。あの頃無理だったことでも、今ならできる……。もし俺も生きてれば……」

「一郎くん……！」

私は思わず叫んでいた。一郎くんの体が、透けていた。

夕暮れの透明な空よりも更に透明になっていく一郎くんの体。

私は焦りを覚えてなんとか一郎くんを捕まえようとした。だが、悲しくなるほどあっさりとその手は空を切った。

触れられない。一郎くんに触れられない。

「一郎くんやだ……！　また別れるなんて嫌だ……！　せつかくまた会えたのに、やっと私、ここまで来たのに……！」

私は無我夢中で叫んだ。腕の中のルルが身を擦って私にニアアと鳴いた。

「私、不安なの……！　一人で大人になるのが怖い。笑っちゃうでしょ。あの頃はあれだけ大人になりたいって思ってたくせに、いざそうになると、不安で、ひとりぼっちになっちゃったみたいな気に

なるの……！ もう誰も頼っちゃいけないって言われてるみたいで、私……、私一人じゃ大人になんかなれないよ……！」

私はルルを抱いたまま、その場に膝を着いた。一郎くんはしばらく黙ったまま私を見下ろしていた。

幻滅されたかもしれない。そんな不安が胸をよぎった。引き留めようとして、自分でも恥ずかしい事を言ってしまった。だが、それは紛れもなく私の本心だった。

「……三条……」

一郎くんの声がすぐ近くで聞こえた。だけど私は顔を上げられなかった。

「……俺はもうお前と一緒に大人にはなれない」

一郎くんが静かな声でそう言った。私は唇をかみ、ますます俯いた。わかってる……

「……でもずっとお前を想ってるから」

一郎くんの透き通った手が伸びてきて、私の腕の中のルルの頭を撫でた。

「たとえば、見えなくなっただってチヨビと一緒に、ずっとお前のそばにいる」

私はハッとして顔を上げた。

すぐ近くに一郎くんの顔があった。

ルルが私を励ますようにニヤアと鳴いた。

「だからお前は大丈夫だ」

一郎くんが力強く言い切った。

大丈夫――。

私は目を閉じた。涙が押し出されてまた頬に伝う。一郎くんの透き通った手がそれを拭おうとしたけれど、僅かな感触を残すだけで彼の手は私をすり抜けた。それでも。

「……うん」

私は小さく頷いた。

一人暮らしを始めて、前のように両親が頼らせてくれなくなって、学校でも皆より年上だということで本当に打ち解けられる相手ができなくて、自分は孤独だと思っていた。今もその状況は何も変わっていない。けれど。

誰かが私を想ってくれている――。それだけでどうしてこんなにも安心できるのだろう。

ずっとそばにいるだなんて、到底実現し得ないような言葉。でも、それでも、一郎くんがそう言ってくれたことが、私の中の何かを溶かした。

私は独りじゃない。

「うん……」

私はもう一度頷いた。今度は自分で涙を拭って一郎くんを見上げる。一郎くんは一瞬眩しそうな、切なそうな表情を浮かべた。だけど、すぐにいつもの、あの悪戯好きの少年の顔に戻る。

「よし」

一郎くんが満足そうに頷くと悪戯っぽく笑った。と、不意にその顔が私の顔に近づいた。

まるで桜の花びらが掠めたような、そんな感触だった。目を開くとそこにはもう誰もいなかった。腕の中のルルももういない。

急に私の脇を車のエンジン音が通り過ぎていった。

辺りを振り仰ぐと、誰もいなかったはずの国道には、帰宅ラッシュに湧く車で溢れていた。夢ではないかと疑うほど、一郎くんやルルの存在は跡形もなく消えていた。残っているのは、ただかすかに触れた少年の唇の感覚だけ。

「マセガキ……」

私は小さく呟くと、ぷつと吹き出した。ファーストキスが幽霊だなんて、誰が信じてくれるだろう。

もう会えないのだと思うとやっぱり胸が苦しくて涙が止まらなかったけれど、不思議と寂しくはなかった。たぶん、私はもう「大丈夫」なのだろう。

「……お腹すいたな……」

コンビニに寄ってパンでも食べようか。

そして、茜色に染まった懐かしい町を私は一人、歩き出した。

私は学生の波に乗って電車を降りると、そのまま波に任せたまま、階段を上り、改札をくぐる。

大学への坂道は結構なかなかキツイ。上がりきるころには微妙に息が上がっている。

やっと校門にたどり着くと、友人のナミが待っていた。

「おはよー。今日は大丈夫？」

「うん。昨日は急に休んじやってごめんね」

ナミはニツコリ笑いながら首を横に振った。

「ねえ、今日はナミも三限で終わりだよね」

私は軽い口調で言ってみた。

「うん」

「私の誕生日、つき合ってくれない？」

ナミが大きな目をますます大きくして言った。

「今日誕生日なの？」

私はニツコリして頷いた。

「そう。記念すべき20回目のバースデーなの」

「え？ 20回…？」

ナミが戸惑った様子で私を見た。頑張れ私。勇気を出すんだ。

私は笑顔が引きつるのを必死に堪えながら努めて明るく言った。

「私実は一浪してるんだ。恥ずかしくて言えなかったけど……」

うう。沈黙が怖い。私はナミを直視できなかった。ただ早口に述べていく。

「あのでも気にしないでね。私なんてみんなよりずっと子供っぽいし、実際ガキンちゃだし……あの……それで……私一個年上だけど……今まで通り、仲良く……してくれるかな……」

最後は俯いてしまう。でもなんとか言えた。それだけで昨日までより余程いい。

ハラハラしながら反応を待っていると、いきなりナミが吹き出した。

「なんか最近元気ないなって思ってたけど、それが原因だったんだ。私もっと深刻なことかと……」

ぽかんとしている私にナミがどうしようもない子供を見るような目で私を見た。

「まあ今更って感じだね。私たちもう友達じゃん。今更そんな暴露されても何も変わんないよ。まあ、夏樹が年下に失礼な態度取られるのが嫌なら仕方ないけど」

私は慌て叫んだ。

「嫌じゃないよ！ 嬉しいよ！」

ナミがまた吹き出した。

「失礼で嬉しいって。あー、やっぱり夏樹って面白いわ……」
「……ナミィ……」

でも私も一緒に笑ってしまふ。
するとナミがマジマジと私の顔を覗き込んできた。

「夏樹、何か変わったね」

「え？」

「なんかやけに晴れやかかっていうか…なんか違う。――昨日、何かあった？」

私、そんなふうに見えるのだろうか。

私はふふつと笑うと、そつと唇に指を触れた。

「長い初恋が終わったの」

「ええ？ なにそれっ」

何があつたの？！ と追及してくるナミから走って逃げながら私は自然と笑い声を上げた。

十年越しの恋は、大切な人と一緒に消えてしまったけれど。

「大丈夫……」

私は彼の言葉を小さく呟いた。

私はもう、立ち止まらない。

だって私は決して独りではないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6792i/>

ソーロンググッバイ

2010年10月28日00時44分発行